

紙上講座IV

二世 十返舎一九のこと(1)

講師 藤井 実さん(東町花輪)

東町花輪郵便局から中野方面に向かつて一八〇ほど行った道の左側に「糸井鳳助の生家」左横面には「二世十返舎一九滑稽本作者(以下の刻字略)」と刻まれた石柱(昭和五十八年一月東村教育委員会建立)がある。



今年度は、この「糸井鳳助二世十返舎一九」のことについて記してみる。

今年のNHK大河ドラマは「べらぼう」つたじゅうえいがのゆめばなし「萬屋重三郎乃夢囃し」。「写楽、歌麿を世に送り出し、江戸のメデイア王にまで成り上がった萬屋重三郎と萬屋重三郎の波乱万丈の物語」。

萬屋重は、世の流れの先を見据

え江戸の文化を彩っていく。

そこには、萬重を囲む個性豊かな「仲間」があった。

萬重に光を与えられ今日も知られる巨星たちが育った。

喜多川歌麿(きたがわ うたまろ)・東洲斎写楽(とうしゅうさいしやらく)・曲亭馬琴(きょていばきん)・滝沢馬琴(たきざわばきん)・十返舎一九(じゅっぺんしやいっく)らである。

※歌麿・写楽は浮世絵師

歌麿は、大首絵の美人画。代表作は「ポッピン(ピーロ)を吹く娘」

写楽は目鼻立ち・ポーズをデフォルメした大首絵。代表作は役者絵「奴江戸兵」

※馬琴・一九は読本作家。

馬琴の代表作は「南総里見八犬伝」

一九の代表作は「東海道中膝栗毛」

十返舎一九の「二世」を称したのが「糸井鳳助」である。

鳳助は雅号が頻繁に変わったので便宜上「鳳助」と記す。

鳳助について『群馬県姓氏家系大辞典』には次のようにある。

糸井鳳助 生没年不詳。江戸後期の戯作者。本名武、花輪堂・赤城子などと号す。

花輪村(勢多郡東村)生まれ。江戸に出て蜀山人に狂歌、蹄齋北馬に面を学ぶ。

師事した十返舎一九ばりの風流を継承し、人情の機微に触れた戯作を著す。

天保二年(一八三二)、二世十返舎一九を名乗った。

※鳳助の誕生の地「花輪村」

の記述について、天保四年(一八三三)鳳助自身作の人情本『仇競今様櫛』(あたくら

べいまようぐし)の第三編に狂歌師四方正木は「かみつけのくにくろかわ」「上毛州黒河の里の産」と記している。

※「黒河の里」は黒川郷のこ

とで黒保根や東を指し示す。

※「黒川郷」は黒川山中・黒川谷あるいは、大間々山中や神梅山中とも表記される

※「四方正木」の読みは不明。

ただ「四方」が付いているので、狂歌師「四方赤良」の弟子または一門であろうか。

※蜀山人(呼び名は おおたなんぼ) 狂歌名 四方赤良(よものあから)の別名)は江戸後期を代表する知識人であり読本作家である。

また狂歌界でも三大狂歌師の一人であった。

この蜀山人門下にあった時鳳助は「瀧糸文」の雅号(ペンネーム)をおくられそれを名づけた。

南畝は初期の萬屋重三郎を支えた「仲間」の一人。(大河では桐谷健太が演じる)

※蹄齋北馬は葛飾北斎の弟子のなかで、力量が筆頭と言われた浮世絵師。

このことから、江戸に出た鳳助は、狂歌師蜀山人(大田南畝)

や浮世絵師蹄斎北馬ら当時一流の師たちの教えを受けたことがわかる。

鳳助は二十七歳のとき、十返舎一九から「十字亭三九」の雅号をおくられた。

※「鳳助二十七歳」はいつのことだろうか。

一八二七 文政十一年、一八二八 文政十二年、一八三〇 文政十三年（天保元年）などの説がある。

※私見は文政十一年である。彼の作品（『魁梅枝曾我』）

の「序」に「文政十一年春脱稿（原稿を書き終える）。文政十二春新版（初めて売り出す）」とあり、出版者は「十字亭のあるじ系井三九」とある。

※すると、鳳助の生誕は、寛政十一年前後であろうか。

※「三九」名は、一九に入門した時の鳳助の年齢「二十七」にちなみ「三×九」で「三九」になったという。

「三九」の名は、狂歌師としての一面をもつ十返舎一九の洒落た名付けであった。

※狂歌師の名には

朱楽菅江（あけらかんこう）宿屋飯盛（やどやのめしもり）酒上不埒（さけのうえのふらち）尻焼猿人（しりやけのさるんど）筆綾丸（ふでのあやまる）和琢舎綾丸（わたくしやあやまる）葛屋重三郎の葛唐丸（つたのからまる）等々
狂歌師はみな、粋な（ぶざけた）狂名を持っていた

鳳助の幼き頃について『勢多郡誌』『勢多郡東村誌』によると、鳳助は幼きより学びを好み、且つ文才に富んでいた。

十五、六歳の時、黒保根医光寺住職に「一切経」を借り読破し、その奥深さに触れたと云う。

※一切経とは釈迦の教えや注釈書などを総集した経典

鳳助が江戸に上ったのは、二十歳前後の頃であろうと云う。

鳳助が江戸に上った「動機が何であったか」はわからない。

※鳳助は狂歌師・戯作者を志し江戸に上ったのか。

※鳳助と江戸・蜀山人の仲立ちをしたと思われる花輪の狂歌師淺嶺庵作良がいた。

では、鳳助と江戸を結びつけたであろうその背景を当時の様子から考えてみる。

初めに、慶安二年（一六四九）

に整備された江戸と足尾を結び銅を運ぶ官道「足尾銅山街道（あかがね街道）」の存在である。（以後、銅山街道と記す）

※足尾の銅は慶長十五年（一六〇）に足尾山中備前楯山で発見された。

※銅山街道は、足尾で採掘された銅鉱石を製錬した精銅を江戸に運ぶための官道

銅は、馬の背に四五kgづつ左右に振分けられ、沢入・大間々間は十頭以上を要し運ばれた。

沢入銅藏から花輪銅藏（三里半）に運び入れ、花輪銅藏からは大間々（桐原）銅藏（三里）へと運ばれていた。

※大間々（桐原）からは藪塚・亀岡を通過して利根川沿いの平塚河岸（後に前島河岸）から利根川を下り、江戸浅草へと運ばれた。

※花輪銅藏は慶安二年（一六四九）銅山街道整備に伴い設けられた。現在の銅藏は昭和五十三年頃改修したもの。

※大間々の銅藏は、当初大間々本町通りの四丁目と五丁目の境付近に置かれていた。文化十年（一八一三）現存の桐原の銅藏に移った

花輪宿は、銅の荷継場・宿場として、雨の日も風の日も、行き交う人馬で賑わっていた。

次回は「花輪宿」と「大間々のこと」についてです